

死考と弔いを醸成する空間
かれたとて、いま

人間空間デザインコース

2011031 来田玲子

令和5年12月12日提出

要旨

私は、幼い頃から、「生きる」という行為や「自分」という存在そのものに疑問を抱いてきた。人はなぜ自我を持ち、悩み、死という終わりを恐れてしまうのか。コロナ禍での孤独や祖父の死がそんな思考をより深めた。ある日、環境芸術論の講義で紹介されたスウェーデンの「森の墓地Skogskyrkogården」。スウェーデン人の死の根源である「森に還る」という思想を反映した環境設計、そして、時を経ても変わらないデザイン力に惹かれた。幼い頃から抱いてきた生や自我への疑問に対しても、弔いの場の提案は最適のように感じ、卒業研究のテーマにすることを決めた。私は、「死と向き合う機会の減少」と「弔いをどう継続していくか」という二つの問題に対し、死考と弔いを醸成する空間を提案する。同時に、提案に至るまでの探求プロセスも公開することで、鑑賞者に「死考」や「弔い」といった死の問題を自身や社会の問題として考えるよう促す。

本研究の目的を以下の三つ定めた。①死の問題に向き合うきっかけ/弔い空間の新しい姿を示すことで、「死をどう扱っていくか」という問題を個人や社会の問題として認識し、考えるきっかけを作りたい。「死考」や「弔い」の本質は心理的な概念であり、自身が思考することから始まるからだ。その思考のヒントとなるよう、本研究の探求プロセスなども提示する。②生活に「死考」を取り込む/「死」は、立場も年齢も関係なく、誰にでも平等に訪れるものだ。「死」と向き合うことで、今の「生」にも向き合える。そのため、死と向き合う「死考」を醸成する空間を提案したい。③死者への感情の置き場所/弔いは、生者が死者の存在を再認識し、生前とは違う新しい関係を築くことで行える。悲しむ人々が親しい人たちの死を受け入れるために、「死者を思い、気持ちの整理を行う場所」、「死者への感情の置き場所」が必要である。④個々での弔いから共同体による弔いへ/ライフスタイルの変化や無宗教化により、永代供養、樹木葬、散骨、手元供養など、葬送やお墓の在り方にも多様性が生まれてきた。一方、無縁墓や無縁遺骨が問題となり、血縁者、親族だけでは、「弔い」を持続的に支え続けることができなくなっている。この問題を解決するには、近年、日本が行ってきた血縁者・親族間のみでの弔い/葬儀やお墓の管理から一歩踏み込み、もっと大きな集団/共同体で死者を弔うことが必要である。

この目的のため、「死考」と「弔い」について調査し、整理を行った。死考とは、「死隋念/マラナサティ」、「メメント・モリ」のように今という生を大切にすることである。宗教性を感じさせず、現代に適応した率直な行為という意味を持たせるために、今研究では「死考」と言う言葉を選んだ。死について考え、「生」に自分なりの意味を見出し、受け

入れる。「死」という避け得ることのできない平等を受け入れた時、より鮮明になる「生」の尊さ。今日という日を一生懸命に生きるきっかけとなる。命が有限であることが、世界の美しさに気付かせてくれる。

「弔い」とは、過去を今の私たちが受け取り、未来へと繋げていくためにある。生者のための、社会という循環する共同体のための儀式である。弔いを続けることは、人が人であり続けるための行為なのだ。しかし、古来の「村」のような土着性の高い共同体の復活は現実的でない。これからは「弔い」そのものを目的とした共同体/コミュニティを作るべきである。過去の他者への弔い、自分の弔い、そして、これからの未来の他者への弔い、その全てを目標にするのである。世代を超えた弔いの共同体に属しているという認識が、弔いの循環を可能にする。

こういった死考や弔いの整理を元に、日本人の死生観を知るため、民間信仰について調査を行った。特に、提案の指針となると感じた死生観は以下の三つであった。①他界化信仰/靈魂の帰る場所である「あの世」を近隣の山や海に想像し、信仰したこと。同時にその地域の葬送の在り方も現れたものだった。②靈魂信仰/日本人は魂を恐怖と恩寵の二面性から捉えてきた。靈魂が鎮められ、神に近づいていくという「靈魂の昇華」は、日本独自の死生観である。この死生観を持つことによって、祖先という過去の他者に感謝し、自分もいずれ祖先として弔われ続けるという未来の希望を見出すことができた。靈魂信仰による祖神化は、共同体を持続させる歯車にもなっていたのだ。③荒神神楽/三つの神のゾーニングによって、自然をありのままに受け入れつつも、その強大な力で起こる災いを荒魂とし、自分たちを守る祖霊になるよう鎮魂していたことが分かる。古来の日本人にとっては、自然を含め、認識できる世界は全て因果関係を持って存在していた。

これらの整理を基に、死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」を提案する。対象敷地は鳥取県鳥取市の青島である。新たな葬送システムとして、堆肥葬とその堆肥によって育てられる種子による弔いの継続を目指す。また、民間信仰といった日本人の死生観に基づいた空間作りを行った。空間の提案に加え、探求プロセスとして、メモや参考にした文献、思考の漫画などを展示した。

目次

| | | |
|-------|------------------------|----|
| 第1章 | はじめに | |
| 1.1 | 背景 | 1 |
| 1.2 | 目的 | 2 |
| 1.2.1 | 「死考」や「弔い」に向き合うきっかけ | 2 |
| 1.2.2 | 生活に「死考」を取り込む | 2 |
| 1.2.3 | 死者への感情の置き場所 | 2 |
| 1.2.4 | 個々での弔いから共同体による弔いへ | 3 |
| 1.3 | 研究の流れ | 3 |
| 1.4 | 本論文の構成 | 3 |
| 第2章 | 「死考」について | |
| 2.1 | 死を受け入れる「死考」とは | 5 |
| 2.2 | 死の恐怖は時間軸から | 6 |
| 2.3 | 離れていった死考 | 7 |
| 2.4 | 死考という概念を得る意味 | 8 |
| 第3章 | 「弔い」についてなぜ人は死者を弔うのか | |
| 3.1 | なぜ人は死者を弔うのか | 10 |
| 3.2 | 弔いを続けられない日本社会 | 10 |
| 3.3 | 現代社会に対応した持続的な弔いとは | 11 |
| 第4章 | 日本人の死生観 | |
| 4.1 | 他界化信仰 あの世の場所 | 14 |
| 4.2 | 霊魂信仰 魂が持つ恐怖と恩寵 | 14 |
| 4.3 | 荒神神楽 神話から鎮魂儀礼へ | 15 |
| 第5章 | 死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」 | |
| 5.1 | 対象敷地・青島について | 17 |

| | | |
|-------|------------------------------|----|
| 5.2 | 葬送システム「かれたとて」とコミュニティ「いま」 | 17 |
| 5.3 | 斎場「神籬」死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」 | 19 |
| 5.3.1 | 渡り橋 | 19 |
| 5.3.2 | 門 | 19 |
| 5.3.3 | 斎場 | 21 |
| 5.3.4 | 広場 | 21 |
| 5.3.5 | 支度庵 | 22 |
| 5.3.6 | 礼拝堂 | 23 |
| 5.3.7 | 探求プロセス | 25 |
| 第6章 | 結論 | 26 |
| | 参考文献・参考事例 | 27 |
| | 謝辞 | 28 |

第1章はじめに

1.1 背景

私は、幼い頃から、「生きる」という行為や「自分」という存在そのものに疑問を抱いてきた。人はなぜ自我を持ち、悩み、死という終わりを恐れてしまうのか。コロナ禍での孤独や祖父の死がそんな思考をより深めた。ある日、環境芸術論の講義で紹介されたスウェーデンの「森の墓地 Skogskyrkogården」。スウェーデン人の死の根源「森に還る」という思想を反映した環境設計、そして、時を経ても変わらないデザイン力に惹かれた。幼い頃から抱いてきた生や自我への疑問に対しても、弔いの場の提案は最適のように感じ、卒業研究のテーマにすることを決めた。弔いの場の提案にあたり、死と弔いに関する現代社会の二つの問題を取り上げることとした。

一つ目は、死と向き合う機会の減少である。医療技術が発展した現代においても、誰も「死」から逃れることはできない。古来より人類はこの「死」に向き合うため、宗教によって死の意味付けを行い、死後の世界を想像してきた。しかし、信仰する宗教を持たない無宗教派の人々が増加している現代では、「死」に対する定義が曖昧になりつつある。加えて、医療の発展による長寿化や人間関係の希薄化による身近な死の減少も、死に向き合う機会を減少させている。本来、生きていく上で、死の恐怖の克服や生の意味を問うことは逃れられないテーマだ。「死」を自身なりに定義し、考えることは、対照にある「生」をより豊かにする。私は、この「死」について思考する行為を「死考」と定義した。死への想像力を養い、死を思考する「死考」を促す機会が、もっと日常に必要だと考えた。

二つ目は、弔いをどう継続していくかということだ。近年、核家族化や都市化などライフスタイルの変化に伴い、弔いに対する価値観が大きく変わってきている。お墓までの距離や管理の大変さから、先祖のお墓を移動させる改葬や墓を閉じる墓じまいを選択する人が増えた。共同納骨堂や手元供養など、供養の形も多様化している。一方で、改葬も墓じまいも行われず、何年もお参りの形跡のない無縁墓の増加も問題となっている。お墓だけでなく、引き取り手のいない遺骨も問題に挙がる。経済的に余裕があっても、既婚者であっても、親族との関係が疎遠だったために、死後、無縁遺骨となるケースは珍しくない。かつてより日本では、弔い葬儀やお墓の管理は、血縁者が担うという認識がある。実際には、血縁者だけでの管理が難しくなれば、同じ村の住民も管理するなど、集団的な弔いが行われきた。都市化や核家族化といった社会環境の変化に伴う人と人との繋がり希薄化は、こういった集団的な弔いを失わせ、弔いを真に血縁者、親族だけの個々の役割にして

しまった。血縁者、親族のみでは、「死」を支え続けることはできない。どう死者を弔っていくか、今こそ、社会全体で考えていく必要がある。

私は、「死と向き合う機会の減少」と「弔いをどう継続していくか」という、二つの問題に対し、死考と弔いを醸成する空間を提案する。同時に、提案に至るまでの探求プロセスも公開することで、鑑賞者に「死考」や「弔い」といった死の問題を自身や社会の問題として考えてほしい。

1.2 目的

1.2.1 死の問題に向き合うきっかけ

前節で述べたように、現代社会には死考や弔いの継続が難しくなっているという問題がある。本研究では、この問題に向き合うため、死考と弔いを醸成する空間を提案する。墓地や礼拝堂といった弔い空間の新しい姿を示すことで、「死をどう扱っていくか」という問題を個人や社会の問題として認識し、考えるきっかけを作りたい。「死考」や「弔い」の本質は心理的な概念であり、自身が思考することから始まるからだ。その思考のヒントとなるよう、本研究の探求プロセスなども提示する。

1.2.2 生活に「死考」を取り込む

社会学の分野では、かつての死の身近さと比較し、医療技術の発展や核家族化、都市化に伴い、現代は死が遠いという見方が一般的だ。昨今では、死に関する書籍や終活も話題となるが、依然として、死を未来の話と捉えている人が多い。「死」は、立場も年齢も関係なく、誰にでも平等に訪れるものだ。「死」と向き合うことで、今の「生」にも向き合える。そのため、死と向き合う「死考」を醸成する空間を提案したい。

1.2.3 死者への感情の置き場所

親しい人の死後、葬儀だけでは気持ちが整理できない人々が存在する。死者と生者の関係性の深さによっては、医学的な心肺停止の「死」と、その人が亡くなった事実を受け入れる「死」は全く違う認識であるからだ。弔いは、生者が死者の存在を再認識し、生前とは違う新しい関係を築くことで行える。悲しむ人々が親しい人たちの死を受け入れるために、「死者を思い、気持ちの整理を行う場所」、「死者への感情の置き場所」が必要である。

1.2.4 個々での弔いから共同体による弔いへ

ライフスタイルの変化や無宗教化により、永代供養、樹木葬、散骨、手元供養など、葬送やお墓の在り方にも多様性が生まれてきた。一方、無縁墓や無縁遺骨が問題となり、血縁者、親族だけでは、「弔い」を持続的に支え続けることができなくなっている。この問題を解決するには、近年、日本が行ってきた血縁者・親族間のみでの弔い/葬儀やお墓の管理から一歩踏み込み、もっと大きな集団/共同体で死者を弔うことが必要である。

1.3 研究の流れ

本研究は、死考と弔いの共同体を醸成する空間を提案する。対象敷地は、鳥取県鳥取市の湖山池に浮かぶ青島である。島までの動線、ランドスケープ、斎場、礼拝堂、運営方法を示し、島全体をデザインする。死考と弔いを醸成する空間とは、「日常に死考を取り込む空間」、「個々での弔いから共同体による弔いを促す空間」、「死者への感情の置き場所となる空間」である。以上を踏まえ、本研究の重要テーマである「死考」がどのような意味を定義しているかを明確にする。その上で、主要な各宗教がどのように死に対してアプローチを行っているか、無宗教化が死考にどのような影響を与えているかをリサーチし、死考の意義を整理する。また、もう一つの重要テーマである「弔い」の事例や現状を整理し、社会に対応した永続的な弔いとはどのようなものか整理する。「死考」と「弔い」の意味や現状を整理した上で、二つの行為を促す根底が日本人の死生観にあるのではないかと考察し、仏教が伝達される前から発展してきた民間信仰の調査を行った。そこから、霊魂信仰や他界化信仰、荒神神楽にヒントを得て、死考と弔いを醸成する空間を提案する。この空間提案と提案までの探求を提示することで、「死を考える意味」や「弔いを継続するにはどうしていきべきか」という問いを生むことを目指す。

1.4 本論文の構成

第1章では、研究の概要として背景や目的を述べ、それに対するアプローチを示す。第2章と第3章では、死考と弔いを醸成する空間の提案に向け、「死考」と「弔い」の定義や現状を説明する。一つ目の「死考」は、“死”について考えることで対象に存在する“生”を色濃く、豊かにするという造語である。二つ目の「弔い」は、一般的な意味や現状を整理する。どちらの言葉においても、これまでの歴史と現代社会での問題点を明確にする。

第4章では、提案指針となる日本人の死生観を民間信仰から探る。古来では、日本では山や海といった自然に遺体を安置する、風葬・水葬が主流であった。そのため、人々は死者の国を山や海といった葬送の地にあると信じた。こういった信仰を他界化信仰という。また、死後しばらくは魂が怨念を持った存在とされ、鎮魂によって祖神へと変化する霊魂信仰など、着目した民間信仰の考えや事例について説明する。荒神神楽の持つ鎮魂儀礼の意味や人間界と自然界のゾーン分けなどを参照し、その後の提案方針に繋げていく。第5章では、第2~4章で整理した死考や弔い、日本人の死生観をもとに「死考と弔いを醸成する空間 かれたとて、いま」の提案を述べる。第6章では、本研究の結論を述べる。

第2章「死考」について

2.1 死を受け入れる「死考」とは

「死考」とは、死について思考することを指す語である。この語は、坂口安吾作『太宰治情死考』という随筆のタイトルによって登場した。坂口は、終戦直後に若者に人気を博した無頼派に属す、太宰治と盟友であった人物だ。太宰は「小説が書けなくなった」と遺書を残したが、坂口はこの理由を「芸道人の身悶」と一蹴する。

小説が書けない、というのは一時的なもので、絶対のものではない。こういう一時的なメランコリを絶対のメランコリにおきかえてはいけない。[坂口安吾, 『太宰治情死考』, 1948]

死を思考することが、「死考」である。しかし、死を考えるという行為は死を望むことではない。「死にたい」という気持ちを否定はしないが、「殺してやる」と言われたならば、多くの人は態度を一転し、「殺さないでくれ」と命乞いをするのではないだろうか。自殺願望という心のピークは、5分ほど。坂口的に言う、一時的なメランコリである。人はこういった場合、真に「死にたい」のではなく、現実から「逃げたい」だけである。それを死考と履き違えてはいけない。

では、死考とは一体どのような行為なのだろうか。ここでは、私の考える死考に近い「死隋念/マラナサティ」と「メメント・モリ」を例に挙げる。死隋念とは、仏教における死の瞑想や死の観察を指す。つまり、「どんな生命でも死ぬ」という事実を自分なりに観察することで、死を死として受け入れられる。仏教には「無常」という言葉がある。物事は、瞬間瞬間に常に変化しているという意味だ。今、生きているこの瞬間も、秒単位で変化が起きている。わずか1秒後でさえ、どうなるかわからない。1秒後に生きている確証はなく、一方で、目立った変化もないかもしれない。しかし、確実にその進んだ時間の分、死に近付き、老いている。仏教では無常を理解し、死を受け入れることによって、「今」という生をも、そのままに受け入れてきたのだ。一方、メメント・モリとは、「誰もが必ず死ぬことを忘れるな」「死を想え」という意味のラテン語だ。古代ローマ時代、キリスト教を経て、その意味を微妙に変えながら、現代では、「死を意識し、今を大切に生きる」という意味で用いられる。2005年、スタンフォード大学の卒業式でスティーブ・ジョブズは学生に向けてスピーチを行った。癌と診断され、闘病していたジョブズの言葉は現代のメメント・モリの解釈に影響を与えている。

自分はまもなく死ぬという認識が、重大な決断を下すときに一番役立つのです。なぜなら、永遠の希望やプライド、失敗する不安……これらはほとんどすべて、死の前には何の意味もなさなくなるからです。本当に大切なことしか残らない。自分は死ぬのだと思い出すことが、敗北する不安にとらわれない最良の方法です。

[スティーブ・ジョブズ, 『ハングリーであれ。愚か者であれ。スピーチ全訳』, 日本経済新聞]

このように「死隋念/マラナサティ」、「メメント・モリ」ともに死を受け入れ、今という生を大切にすることを説いている。宗教性を感じさせず、現代に適応した率直な行為という意味を持たせるために、今研究では「死考」という言葉を選んだ。死考も同様に死について考え、「生」に自分なりの意味を見出し、受け入れることである。「死」という避け得ることのできない平等を受け入れた時、より鮮明になる「生」の尊さ。今日という日を一生懸命に生きるきっかけとなる。命が有限であることが、世界の美しさに気付かせてくれる。

2.2 死の恐怖は時間軸から

では、なぜ、人は「死」を恐れてしまうのだろうか。それは、過去・今・未来という時間軸を手に入れたからである。他の動物が認識できない時間意識を持ったことにより、因果・矛盾・蓋然性といった概念を手に入れ、生物的なパフォーマンスが向上した。一方、時間意識によって「自分」という長い時間にわたる同一性を認知することとなる。この自己同一性が自我の正体であり、「自分」という自我がなくなることが一番の恐怖となった。つまり、死による自我の消滅を恐れるようになったのだ。過去も未来も、「自分」は「自分」であるという認識があるからこそ、消えてしまうことへの恐怖心が出てくる。こういった自我の消滅による死への恐怖を克服するため、不変の自我が死後にも存在する「あの世」という世界を想像するようになった。死後の世界が存在すれば、肉体が亡んでも自我は存在を続けられる。キリスト教もイスラム教も仏教も、宗教の多くが死後の世界を説いているはそのためではないだろうか。

しかし、宗教によって、人々の「死」に対する向き合い方は異なる。キリスト教では、イエス・キリストは刑罰によって死亡し、そして、復活という流れを組む。このことから、キリスト教にとっての死は、人間の原罪がもたらした罰であり、信仰することにより、魂

は救済されるという認識がされる。一方、イスラム教では、命は神から与えられたものとし、命の所有権を神としている。信仰することによって、この世の生を終えた後、樂園に行くことを理想とするのだ。キリスト教、イスラム教は共に死を終わりとして捉えるのではなく、「死」後の世界を目的に信仰していく。これは、どちらも一神教であり、神の力が絶対的であることが影響する。信仰することによって提供されるあの世の世界によって、死の恐怖を乗り越える形である。

一方、仏教では前節で紹介したような「死隋念」、「無常」の考えがあり、死を死のままに受け入れる。死をいかに受容するかを課題とし、心乱さない仏になることを目指す。死を終わりとして受け入れ、今世での苦しみからの解放を目指すために信仰していくのだ。日本人の死生観には、一般的に仏教からの影響が大きい。仏壇や墓石の形態、葬送まで多くに仏教が関わっている。一方で、現在の日本人の死生観は、仏教伝来以前の民間信仰との結合により形成されていった。『葬祭仏教：その歴史と現代的課題』で仏教学者・伊藤唯真は次のように述べている。

葬墓制それ自体は決して仏教の特定教養から生み出されたものではない。日本の仏教がその精神風土に定着したのは、仏教と異質的な民族固有の信仰契機によってである。換言すれば、祖先信仰と結びつくことによってはじめて、この国に土着したのである。

[伊藤唯真,『葬祭仏教：その歴史と現代的課題』,1997]

今日の日本人の死生観は、固有の民間信仰が最初にあり、その上に伝来した仏教という衣を纏い、形成されていったのだ。この民間信仰を元にした日本人の死生観については、「弔い」にも関連するため、第4章で詳しく説明していく。

2.3 離れていった死考

死の恐怖を乗り越えるため、または、受け入れるため、人々はあの世を想像し、宗教を信仰してきた。では、現代の人々も宗教によって死を考えているのだろうか。現代社会は情報化が進み、価値観の多様化が進む。宗教についても同様であり、無宗教を選択する人々も増加している。こういった無宗教化の流れに加え、医療の発展による長寿化、人間関係の希薄化による身近な死の減少は、死に向き合う機会を減少させている。

社会学においても、死について論じる際、「現代社会は死を避けている」という認識が

前提とされることが少なくない。20世紀後半、社会人類学者ジェフリー・ゴラーが「死のポルノグラフィティ化」を発表し、身近な死が隠される一方で、メディアでは暴力的な死が娯楽道具として広がったと主張した。この主張を踏まえ、歴史学者フィリップ・アリエスは、現代の死を「タブー視される死」と定義した。かつての死の身近さと比較し、現代は医療技術の発展や家族形態の変化、都市化による人口流動性の増加などが死を遠ざけ、タブー視されるものになったという。近年は、死に関する書籍や終活が話題に上り、死を考えるとという行為に対するタブー視が緩和されたという見方もある。

2.4 死考という概念を得る意味

死を考えることは、生きていく上で逃れられないテーマである。死考から離れがちな現代、どう死を考え、今なお終わりに進む生に光を見出すか。

先日、『Sonny Boy』というアニメ作品を観た。理不尽に満ちた世界（異次元）を漂流し始めた中学生の少年少女が超能力に目覚め、サバイバル生活を送っていく。『四畳半神話大系』など独特な表現方法で知られる夏目真悟が、監督・脚本・原作を務めた。BGMやキャラクターのモノログはほとんどないまま、淡々と進んでいき、考える余白を残していく作品となっている。1話ごとに話は完結するが、それぞれ、元ネタとなる物語が存在し、レイモンド・チャンドラー作『長いお別れ』やシャルル・ペロー作『長靴をはいた猫』など、オマージュされた理由、物語の本質を考えながら、鑑賞するのが楽しかった。最終的に主人公は、「死」も「老い」も存在しない時間が止まった異次元からは脱出し、「起こり得ることしか起こらない」現実世界へと戻る。なぜ、あるものがただあるがままに存在し、然るべき流れに沿って変わっていく、夢も希望もない無常な世界にわざわざ戻るのか。主人公は、「世界は変えられない。だが未来は変えられる」と言い、その未来の可能性に希望を抱いたのだった。

羊文学というバンドの『マヨイガ』という曲が大好きである。明日の苦しさや悲しみを肯定しながらも、世界の愛しさに目を向けさせてくれる。「言葉よ どうかいつもそばにあり これからの奇跡に全部形を与えてください」という歌詞は、唸ることしかできないほど、世界のあり方を示しているように思う。考えることは、口にしなくても感情に言葉をのせることである。哲学者のイマヌエル・カントは、『純粋理性批判』によって、人は感覚で捉えたものに言葉や概念を当てはめるものだという「悟性」を主張した。つまり、人はそれ自体のあり方を知っているのではなく、事物を自分なりの仕方を知っている。私たちは

私たちが知っている尺度（言葉や概念）でのみでしか、世界を知り得ることができない。

「認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う」というカント哲学は、私の世界認識に近い。生きている奇跡を奇跡だと認識できるようになるには、「生きていることが奇跡」という概念を獲得する必要がある。しかし、「生きていることが奇跡」という概念には、「死は平等にいつ何時でも訪れる」という概念・死考を持っていなければならない。死という結末があるからこそ、今の生の大切さを考えることができるのだ。

死考は日常の中にある。アニメにも、歌にも、散歩で感じる木漏れ日の中にも、美味しい料理の香りにも。小さな幸せや些細なきっかけが、「生」を実感させる。それは、死考という概念を自身の中に持っているからである。死考は、幸せの輪郭を強めるものだ。

第3章 「弔い」について

3.1 なぜ人は死者を弔うのか

人は、なぜ死者を弔うのだろうか。科学的に考えれば、死者は土へと帰る無生物であり、そこに意思は存在しない。しかし、私たち人間にとって、死者は過去を生きたその人そのものであり、生者とは違う形で「あの人であれば、こうしていただろう」と、考えや行動に影響を与えてくれる。人は死によって、跡形も無く、消滅することはない。亡くなった後でも、生きている人の記憶の中で存在し続けるのだ。

フランスの哲学者のウラジミール・ジャンケレヴィッチは、死を考える際の指針として三つの「死の人称」を定義した。まず、「1人称の死」、自身の死である。自身の死は、絶対性と不可知性という性質を持つ。自身の死は必ず訪れるが、自分の死を知覚することはできない。例えば、自分の遺体を見ることも葬儀を行うことも自分自身には不可能であるからだ。次に、「2人称の死」、近しい人の死である。親子や兄弟姉妹、恋人、友人など人生を分かち合った人々の死は、喪失経験と大きな悲嘆を残し、人生に大きな影響を与える。そして、「3人称の死」、他人の死である。第三者の立場から冷静に判断することができ、多少なりとも心が動かされても翌日以降の生活が劇的に変わることはない。一般的に人々の「弔い」の対象になるのは、この定義に基づく「2人称の死」を遂げた近しい人に対する人である。その人の科学的な「死」からどんなに時間が掛かろうと向き合い、生前とは違う新しい関係性を作り上げていく。もちろん、「3人称の死」、他人の死についても人々は弔う。大震災や戦争など多くの人々が亡くなると、石碑や公園を作り、慰霊を行う。起こってしまった悲しい過去と向き合うのである。

人類が、まだホモ・サピエンスであった時代から、私たちは死者を弔ってきた。死者を埋葬し、花を添え、送り出す。この一連の儀式は、私たちが過去や未来といった概念を手に入れ、見えない世界へ心を伸ばしたことによって生まれた。弔いは、過去を今の私たちが受け取り、未来へと繋げていくためにある。生者のための、社会という循環する共同体のための儀式である。弔いを続けることは、人が人であり続けるための行為なのだ。

3.2 弔いを続けられない日本社会

現在、ライフスタイルの多様化により、定住ではなく、その時々にあった地で生活をする人々が増加している。流動的な生活が一般的になると、「お墓」という動かない弔いの象徴の在り方が難しくなってくる。そのため、お墓までの距離や管理の大変さから、先祖

のお墓を移動させる改葬や墓を閉じる墓じまいを選択する人も増えた。一方、何年もお参りの形跡のない無縁墓の増加が全国的に問題となっている。2013年に熊本県人吉市で行われた無縁墓の調査では、市内の全995カ所の墓地のうち4割以上のお墓が無縁化していることが分かった。無縁墓は、縁故者や継承者の連絡先がわからず、撤去が進まないという実態がある。管理されない無縁墓の存在は、景観的にも治安的にも悪影響が続きやすい。遺骨の引き取り手のない無縁遺骨の問題も大きくなっている。核家族化に並行し、親族との関係性が薄まる近年では、経済的余裕の有無とは関係なく、無縁遺骨になってしまう事例が多い。総務省が2023年3月末に発表した『遺留金等に関する実態調査結果報告書』によると、死亡時に引き取り手のなかった死者の数は、2018年4月から2021年10月までの3年半の間で約10万5千人にも及ぶ。(表1)

こういった無縁墓・無縁遺骨の問題は、弔いを血縁者のみという個々の役割に限定してきたことに原因がある。家族の在り方が多種多様化し、離婚も珍しくない現代社会では、弔いを血縁者という個々に頼るのは現実的でない。しかし、法律上でも、死後のお世話は血縁者のものという風習が色濃く残る。戸籍法上、生前にどんな約束をしていたとしても、死亡届を役所に出せる資格者は親族、同居人、居住不動産の家主のみとされる。さらに死亡後に遺体の引き取り人とされる相続人は、民法によって配偶者、死者の子供、親、兄弟姉妹など3等身内とされている。社会の認識のみでなく、法の仕組みからも弔いの継続を難しくしてしまっているのが現状だ。

| 法律 | あり (市区町村数) | 総件数 | | | なし・不明 (市区町村数) | 回答計 (市区町村数) | |
|-------|---------------|-------------------|-------------------|------------------|------------------|----------------|-------|
| | | 遺留金 あり (件数) | 遺留金 なし (件数) | 有無 不明 (件数) | | | |
| 行旅法 | 424 | 2,852 | 1,286 | 1,548 | 18 | 654 | 1,078 |
| 墓理法 | 497 | 10,154 | 6,710 | 3,421 | 23 | 571 | 1,068 |
| 生活保護法 | 439 | 92,767 | 40,483 | 50,455 | 1,829 | 252 | 691 |
| 合計 | | 105,773 | 48,479 | 55,424 | 1,870 | | |

表1. 『遺留金等に関する実態調査結果報告書』 引き取り手のない死亡人の発生状況

3.3 現代社会に適応した持続的な弔いとは

現在の弔いに関する問題は、弔いを血縁者のみの個々のものにしてしまったことが原因

である。これまでの日本社会では、血縁者がいなくなったとしても、「村」という共同体によって、集団的な弔いに引き継がれた。これは、霊魂信仰の中で育まれた祖神観という過去への感謝、自然への感謝があったからこそ可能だったことだ。哲学者の内山節は、著書『いのちの場所』で次のように述べる。

共同体はつないでいく社会なのである。世代から世代へとつないでいく。だからそのつなぎのなかで死もとらえていた。先祖たちはありふれた一生をやり遂げて、死者となっていく。そして自然と一体化していまの共同体を見守っている。このつながりのなかに加わっていくことが村での死の意味だ。だから人が亡くなったとき、葬儀は遺族が出すものではなく、共同体が出すものだったのである。(中略) 共同体のメンバーとして送り出すのである。〔内山節、『いのちの場所』、2015〕

持続可能な弔いを行うには、共同体という組織自体も持続可能な集団であることが必要だ。共同体は、「自分が与えた分だけ、共同体からも何かを得たい」という等価交換モデルを想定してはいけない。過去から受け取った恩(先祖の知恵や歴史)を返すために、共同体を豊かにしたいと今のメンバーが思い続ける必要がある。過去から譲り受けた豊かな共同体を豊かなまま、未来にパスをする。そのために自分のできることをするという認識が、循環型の持続可能な共同体を作る。しかし、都市化やノマド的な暮らしが主流となった現代社会では、もう「村」という共同体そのものの復活を期待することは難しい。加えて、「村」という共同体を維持するための根拠となった霊魂観や祖神観が現在の日本人の価値観の根底にあったとしても、この情報社会ではそれぞれの多様な価値観が出来上がり、古来のように統一の価値観を持つことは難しいだろう。

そのため、古来の「村」のような土着性の高い共同体ではなく、これからは「弔い」そのものを目的とした共同体/コミュニティを作るべきである。過去の他者への弔い、自分の弔い、そして、これからの未来の他者への弔い、その全てを目標にするのである。世代を超えた弔いの共同体に属しているという認識が、弔いの循環を可能にする。血縁者以外での「弔い」そのものを目的とした共同体/コミュニティの先行事例として、大阪府大蓮寺の生前個人墓「自然(じねん)」という取り組みが挙げられる。「自然」とは、永代供養の生前個人墓を購入するコミュニティである。生前に自身の意思でお墓を申し込み、敷地の納骨を希望する場所に小さな自分の墓石を置く。そして、お墓を申し込んだもの同士で「自

然」の供養を続けていく。「自然」はお盆やお彼岸の供養だけでなく、普段から会合や旅行などを通して、交流を重ねていく。生前では新しいコミュニティである墓友ができ、死後もそのコミュニティから外れることなく弔ってもらえる安心感が生まれる。家族や血縁といった近年の弔いの枠を超え、生前個人墓という共通点を元に関係が繋がり、続いていく。お墓を縁にしての持続可能な弔い共同体として、大蓮寺の「自然」は良い先行事例である。

第4章 日本人の死生観

4.1 他界化信仰 あの世の場所

無宗教化が進む現代において、日本人の死生観を整理することは死考と弔いの空間を構想するために重要である。文献調査を進め、日本人の死生観の根源部分は、民間信仰にあるのではないかと考察した。ここでは、民間信仰の軸である他界化信仰と靈魂信仰、そして、鎮魂儀礼としての神楽について触れていきたい。

まず、他界化信仰である。日本の民間信仰では、靈魂が帰る場所となる他界を想像した。この他界が、今、人々が想像するあの世である。生者と死者、人間と自然、そういった地域社会や生活共同体を一つとして認識していた日本人は他界を近くの自然に見るようになる。一つは山中他界化信仰である。死後、靈魂が鎮まり籠ると言われる霊山が近郷近在に数多く存在する。有名なものとしては、比叡山・高野山とともに日本三大霊山といわれる恐山が挙げられるだろう。恐山は、古くから「死者に出会える」場所として有名である。外輪山に囲まれた霊場は外部からは見ることのできない途絶された空間だ。極楽浄土を思わせる美しい浜、地獄を思わせる温泉が湧き出る谷など、人々の考える「あの世」の風景が広がっている。恐山はこういった風景の他にも恐山菩提寺やイタコと呼ばれる巫女の存在が空間の説得力を増している。他にも、沖縄に伝わる民間信仰「ニライカナイ」が例に挙げられる。地上にあるのではなく、人間が辿りつけぬ海や地の底など、異世界に存在するとされる「ニライカナイ」。恩恵を与えてくれる神様のいる世界であり、死者の行く場所が、遠く海の彼方である。ここでは山中他界化信仰とは少し異なり、人間が辿り着けない、幻想的な楽土としての信仰も入り混じるようになっていった。このように生活に密接な自然の場所を他界化していったが、その幻想的な雰囲気のみで他界を想像していったのではない。気候や文化などに土着した、その地域での葬送が影響を与えている。山中他界化信仰は、風葬や埋葬が山で行われていたことに由来する。風葬は、古来日本では一般的な葬送であった。自然の中で遺体の肉体が消滅すれば、魂も浄化されると考えられていたからである。ニライカナイも、遺体を供養物と船に乗せ、水葬したことから信仰が始まっている。このように、他界化信仰は靈魂の帰る場所である「あの世」を指すと同時に、その地域の葬送の在り方が現れたものだったことがわかる。

4.2 靈魂信仰 魂が持つ恐怖と恩寵

次に、靈魂信仰である。葬送や弔いを行う背景には、死者を「無」ではなく、「魂」と

いう新しい存在として意識していることが挙げられる。日本では、死後間もない魂を「荒魂」とし、厄災を齎す恐ろしい存在だと捉えてきた。死の直後、祟りや障りの元凶となる荒魂は、忌明けの四十九日が済むまで喪家に留まる。そこから、三周忌、七周忌と、年忌供養を重ねるうちに魂は鎮まっていく。この鎮まりは、五十年の弔い上げによって完了し、荒魂は完全に祖霊に変換される。こうして、死者は人々に厄災を与える恐怖の象徴(荒魂)から、人々を保護する恩寵の象徴(祖先)に変わるのだ。葬儀やお墓も、始めは鎮魂の意味から行われていた。例えば、墓に立てる花籠や四門がついた棺台は、古代の殯から始まった風習である。殯とは、死者を本葬するまでの期間、棺に遺体を仮に置いておくこと・ところである。死者の復活を願いつつも、その肉体の腐敗や白骨化を確認することで死を受け入れた。そして、同時に霊魂を恐れ、鎮めるために行なっていたとされる。このように日本人は、どんな人であれ、人は亡くなれば、一度は荒魂となると考えてきた。現在は「荒魂」とその荒れた様子を漢字に当てがうが、音として「新魂」という字も当てることができるのはこのためである。

では、鎮魂されない魂は、どうなってしまうのだろうか。非業の死を遂げた人や弔いを受けなかった人の魂は、生前の穢れが残る怨霊となる。荒魂に加え、こういった怨霊が、社会の災いの原因として考えられていた。そのため、各地で「御霊会」という鎮魂の祭りが行われていた。京都府の祇園祭も元は「祇園御霊会」といい、鎮魂の祭りであった。荒魂や怨霊を祀り、芸能で鎮め、自然へと送り出していく。怨霊という気の毒な死者を捉える霊魂観があるからこそ、日本人は大震災や戦争の犠牲者のために慰霊碑や慰霊公園を作る。

このように、日本人は魂を恐怖と恩寵の二面性から捉えてきた。霊魂が鎮められ、神に近づいていくという「霊魂の昇華」は、日本独自の死生観である。この死生観を持つことによって、祖先という過去の他者に感謝し、自分もいずれ祖先として弔われ続けるという未来の希望を見出すことができた。霊魂信仰による祖神化は、共同体を持続させる歯車にもなっていたのだ。

4.3 荒神神楽 神話から鎮魂儀礼へ

現在では、神道の儀式としてのイメージが強い神楽だが、その由来は古来の鎮魂儀礼から始まっている。日本神話に『天岩戸開き』という話が残る。須佐之男命の乱暴な振る舞いに怒った太陽神・天照大御神が岩戸に隠れ、世界が暗闇に包まれたという神話である。

この天照大御神を外の世界に引き戻すために人々は踊った。この神話は、実際の葬送の情景を物語化したものだと言われている。古来では天皇や豪族といった高貴な身分の者が亡くなると殯を作り、その中にしばらく閉じ込める。これは、死後まもない荒魂を沈めるためであり、魂を鎮める役として遊部が奉仕した。この遊部も歌舞奏楽を行った。この鎮魂の踊りが、神楽となったのだ。現在の神楽は娯楽性が組み込まれ、形態も古来とは異なっているが、「荒神神楽」は鎮魂儀礼としての役割を色濃く残す。この荒神神楽の物語やゾーニングを見ると、日本人古来の死生観である靈魂観、祖神観とともに自然観にも繋がっていることが分かる。

荒神神楽には、三種類の神が登場する。「シキ神」と「外なる荒神」と「内なる荒神」である。「シキ神」は田畑で祀られ、蛇や狐といった動物霊の形で認知されている。「外なる荒神」は森で祀られ、人間の荒魂を象徴するとともに龍などの幻獣霊として認知され、神楽の中で鎮魂される。この「外なる荒神」が鎮魂され、「内なる荒神」となる。「内なる荒神」は、家の中に祀られる祖霊として認識される。このように三種類の神はそれぞれ、「シキ神」が人間の干渉できない自然の摂理、「外なる荒神」が荒魂によって起こされる災い、「内なる荒神」は恩恵を与えてくれる祖先として存在している。(図1) 自然をありのままに受け入れつつも、その強大な力で起こる災いを荒魂とし、自分たちを守る祖霊になるよう鎮魂していたことが分かる。古来の日本人にとっては、自然を含め、認識できる世界は全て因果関係を持って存在していたのだ。

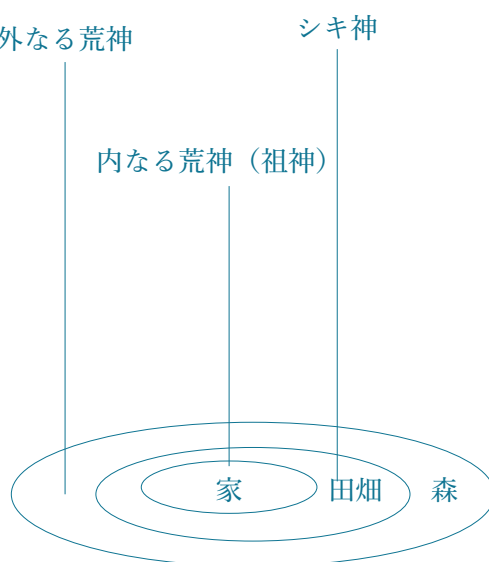


図1, 荒神神楽の神のゾーニング

第5章 死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」

5.1 対象敷地・青島について

提案対象とする敷地は、鳥取県鳥取市の青島だ。青島は、湖山池に浮かぶ島である。湖山池は、かつて日本海の湾入部であり、砂丘の発達により日本海から隔離されて残った潟湖だ。周囲18km、面積が6.9平方キロメートルの日本最大の池である。そこに浮かぶ青島は、陸地から平均500m離れた、面積1.47km²、周囲1.8kmの小さな島である。

中国地方は古来日本の中心地であり、さまざまな伝承の舞台になっている。鳥取県は、ワニ（サメ）を騙し、酷い目にあった兎を心優しい大黒様が助ける「因幡の白兎」という日本神話の舞台になっている。また、湖山池の成り立ちにも「湖山長者」という伝承が残る。湖山長者という大金持ちが持つ広大な土地の田植えを終えるため、太陽を操った。それが、神の怒りを買って、全ての土地を湖山池に変えられてしまったというものである。

こういった伝承に加えて、居住地との距離感も対象敷地に設定した理由だ。鳥取県の中心地から、車で10分ほどと利便性が良く、島が浮かぶ湖山池の周辺も住宅街である。死考と弔いを日常に取り込むために「訪れやすさ」は重要な意味を持つ。こういった居住地に程近い距離感と独立した空間性を持つ青島は、前章で述べた他界化信仰の「あの世」の条件に当てはまる。島を囲む水は三途の川のようにこの世とあの世の境界線として見立てられてきた。島内では青島遺跡という遺跡があり、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての祭祀跡なども発見されている。古来から神聖な場所とされてきたことが分かる。

この青島に新たな葬送システム、建造物を提案し、島全体が死考と弔いの空間となる未来を示す。

5.2 葬送システム「かれたとて」とコミュニティ「いま」

死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」では新しい葬送システムを提供する。この島では、遺体を島内にあるカプセル（図2）によって、堆肥化する。



図2. 堆肥化カプセル

葬送の流れは、以下の通りである。①斎場での葬儀を終えた遺体は、ウッドチップなど堆肥化を促進するコンポスト専用の棺に入れられる。②棺ごと、島内にあるカプセルに入れられ、49日間、時間をかけて堆肥化する。なお、カプセル内は細菌が効率的に活動しやすい環境に整えられており、効率的な分解が促される。③購入した棚畑の区画に散布し、故人の希望に沿った花を育てる。花の世話と種を引き継いでゆくことで持続的な弔いを目指す。(図3)



図3. 葬送システム「かれたとて」

こういった遺体の堆肥化の葬送「堆肥葬」の先行事例としては、アメリカの会社「RECOMPOSE」が行う、「Natural organic reduction」がある。堆肥葬では、遺体を焼くプロセスが必要ないため、火葬と比較すると少ないエネルギー量で、二酸化炭素の排出が抑えられる。また、遺体や遺骨を保存する必要がないので墓を立てる必要もなく、スペースを取らない。使われる素材もオーガニックで、コンポストに使用される棺も使い捨てではなく、再利用される。堆肥葬は、環境に良い最新の葬送として注目されているが、日本ではまだ法律の準備が進んでいない。死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」では、この堆肥葬の一連のプロセスを空間で認識できる。コンポスト専用のカプセルがオブジェのように群生し、故人から生まれた堆肥によって育てられる花々。命の循環を島全体で感じることができる。

また、この島の花々の世話担うコミュニティ「いま」がある。このコミュニティは、鳥取県に住む、この空間で弔われたいと考える人々や地元の子どもたちが参加する。遺族だけでなく、社会全体で空間を保ってゆくことで、死の問題を自身や社会の問題であると認識することを促す。


空間のタイトルにある「かれたとて」には、「枯れたとて」と「離れたとて」という漢字が当てられる。「枯れたとて」は、このシステムで育つ花が枯れたとしても、種とい

う新たな命が続いていくという意味。花が咲き、枯れてゆくその様子は、昔から命の例えとして用いられてきた。もう一方の「離れたとて」は、花の種を引き継ぐことで弔いの場所を固定しないという意味だ。現代社会では、ライフステージに合わせ、流動的に生活するスタイルが一般的になりつつある。肥料となり、土へと帰った場所である青島から離れたとしても、その土壌で育った花の種を育むことでどこへ移動しても弔いが可能となる。葬送システム「かれたとて」は、島全体での共同体での弔いと種による個人での弔いの二面性を持つことができ、現代社会にあった弔いを提供することができる。

5.3 死考と弔いの空間「かれたとて、いま」

5.3.1 渡り橋

死考と弔いの空間「かれたとて、いま」では、斎場での葬儀から堆肥化による葬送まで一連の流れを追うように各施設が存在する。

橋は、神話や伝説にたびたび登場し、天と地を結ぶ象徴性が思われる。例えば、日本神話では「天の浮き橋」が登場する。日本列島を作るため、この橋を通り、神々が自由に天と地の間を行き来したと伝えられる。また、京都府の「天橋立」は、日本列島を作った伊邪那岐神が天に上る橋を作り、それが横に倒れ、天橋立になったとされる。こういった橋の「あの世」と「この世」を結ぶ象徴性から、青島へのアプローチを橋に設定した。デザインは日本の木橋を基本にし、ハチスノイトとケルティック・ノットを連想させる装飾を行った。ハチスノイトとは、蓮の根から生成される糸のことであり、日本ではあの世とこの世をつなぐ存在とされる。ケルティック・ノットとは、一本の紐で出来た始まりと終わりが無い模様である。死考と弔いの空間「かれたとて、いま」の異世界の意味を醸し出すハチスノイトと弔いの永続性を願ったケルティック・ノットを絡め、4のような橋を構想する。

5.3.2 門

門のデザインは、イサム・ノグチの『広島の子供のためのメモリアル』という実現しなかった慰霊碑をオマージュした。このノグチの慰霊碑は、広島平和記念公園の慰霊碑となる予定であった。しかし、メッセージが難解であるなどの理由から、突如、中止となり、現在は丹下健三がデザインした慰霊碑が建っている。中止の理由については、ノグチがアメリカ人とのハーフであることが上層部で問題になったなど様々な憶測が残っている。ノ

グチは中止が決定した後も、模型などを何度も作成し、余生もその制作を望んでいたようだ。アメリカと日本という二つの血縁を持っているからこそ、原爆に責任と痛みを感じ、平和を願っていた。ノグチの慰霊碑は、地上部分だけでなく、地下室を作る予定であった。古墳の頂上に置かれる家形のハニワをモチーフとしている。この家形のハニワの下には、古墳の墓室が位置し、墓の在処を示す役割を果たす。なかにはノグチの慰霊碑の形状のように居室部分を省略して、縦長に引きのばされた屋根だけを残した形状もつくられた。『広島 島の死者のためのメモリアル』の地上の台座部分を古墳のマウンドに見立て、平和記念公園という墓のランドマークに考えていたのだ。ノグチはこのデザインが不採用になったあと、親交があったアメリカの編集者宛てに手紙を書く。そこに『慰霊碑の地下室は遺族の慰めの場所であり、来たるべき生命を暗示させる場所なのだ』という旨の一文がある。つまり、生死について考え、なおかつ未来の子孫に期待を巡らせるような瞑想の場所を考えていたのだ。こういったコンセプトに感銘を受け、今回の提案空間の門としてオマージュした。

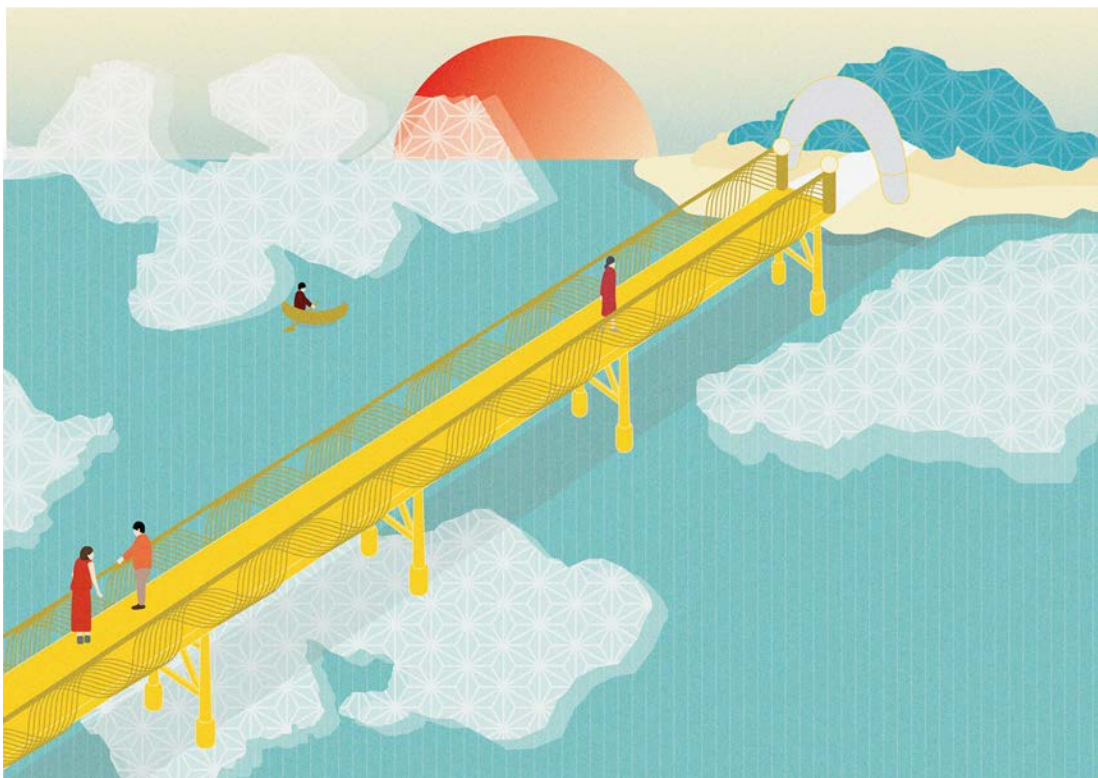


図4. 渡り橋と門

5.3.3 斎場

斎場は、地上の象徴というイメージでデザインした。(図5)木をモチーフにした柱や風を象徴する波状の屋根は、自然とのつながりや生命の象徴としての意味合いを持つ。斎場の壁はガラス張りであり、透明性が取り入れられることで、内部で行われる葬儀が外部からも見えるようになっている。このことにより、空間の訪問者(葬送や墓地に関係なく、日常として訪れた人)は日常的に葬儀の様子を見る。半透明な壁は、閉ざされた空間である斎場を開かれたものに変え、「死」を身近に感じさせる。この斎場のデザインはただ空間を提供するだけでなく、建築物そのものが儀式や慰霊とともに訪問者の共感と結びつく。

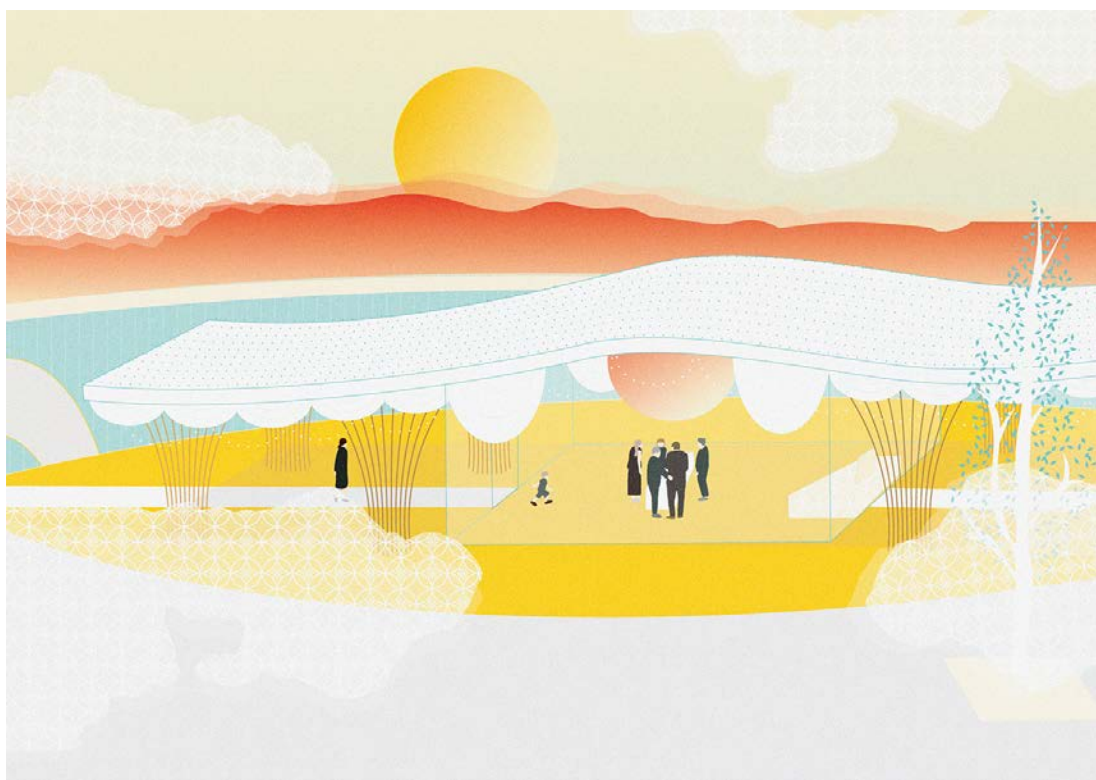


図5. 斎場

5.3.4 広場

広場は、子持ち勾玉をモチーフとし、円が連なるようにデザインした。子持ち勾玉とは、大型の勾玉の腹背や両側面に小型の勾玉をいくつも付着させた形をしたものであり、青島では複数個発見され、古来、祭祀の場所であった証拠となっている。このモチーフは、歴史的な伝統と神聖な意味を象徴とイサム・ノグチの門との関連性を持たせる。また、地上から一段高いステージ型の広場は、空間のゾーニングにも影響を与える巫鎮魂儀礼の荒神

神楽の舞台を連想させる。斎場から始まる曹操での魂の鎮魂の願いを込め、こういったデザインに仕上げた。(図6)



図6. 広場

5.3.5 支度庵

支度庵は、遺体の堆肥化をさせる最後の支度の部屋として作られた小さな庵である。斎場が透明性の高い公共的な空間であった一方、支度庵では私的な、家族や友人との別れの空間となっている。また、支度庵は一軒だけでなく、村のように集まって建つ。その周りには、花を育てる棚畑が広がり、青島の森とも合わせ、荒神神楽の神の存在（内なる荒神、シキ神、外なる荒神）のゾーニングを模範する。(図7)

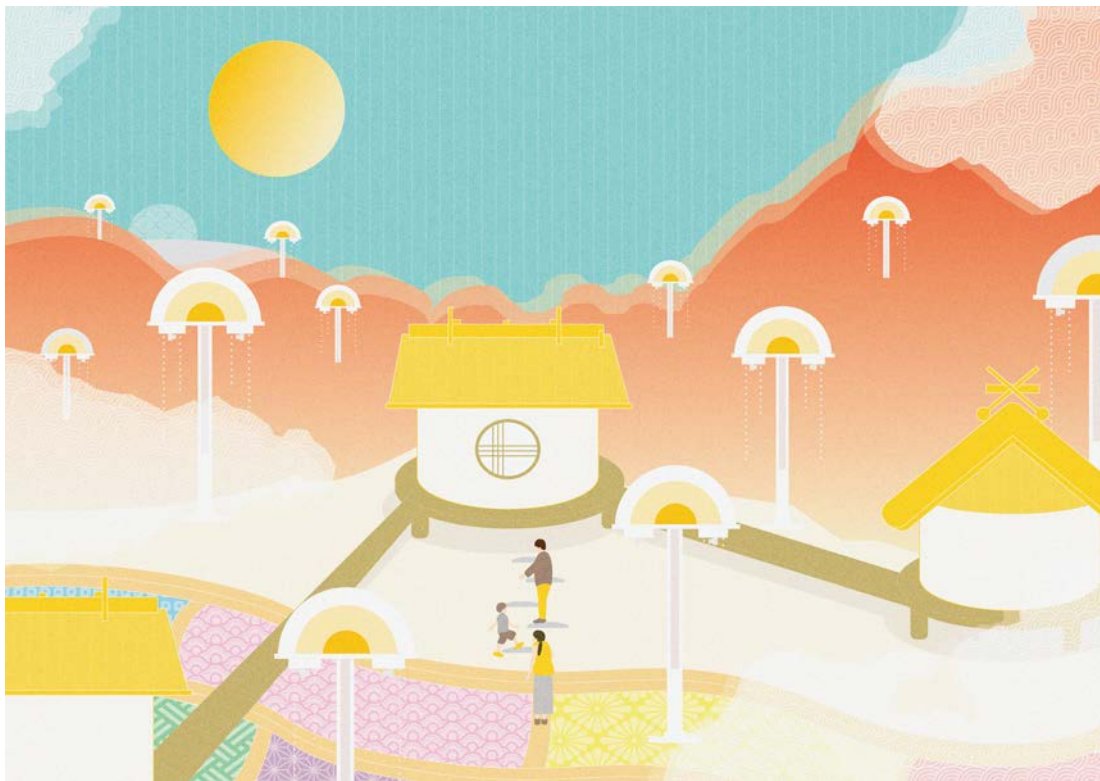


図7. 支度庵

5.3.6 礼拝堂

礼拝堂は、祈りや供養の象徴としてデザインした。堆肥化し、個別性が薄れた死者を、「ここに眠る人々」という大きな枠組みで祈る場所である。全体を吊う礼拝堂の存在により、空間の訪問者（葬送や墓地に関係なく、日常として訪れた人）も訪れやすくなる。建物のデザインには楽器である「輪」がイメージされている。輪の音のように心を沈め、あの世へと供養が届く場所であってほしい。礼拝堂の内部には、「かれたとて」で育つ花々の象徴として、楠が育ち、時の流れを感じられる。（図8）（図9）



図8. 礼拝堂



図9. 礼拝堂の中

5.3.7 探求プロセス

今回の制作にあたり行ったメモや参考にした文献、日々、自身が行っている死考についての漫画なども探求プロセスとして展示した。(図10)



志望文献:「樹木希林120の遺言・死ぬときぐらいい好みにさせてよ」樹木希林2019年五輪社

図10. 思考過程の漫画

第6章 結論

死考と弔い、そして、死生観について、社会学、民俗学、文学など多方面から調査し、整理を行った。これらの整理を基に死考と弔いを醸成する空間「かれたとて、いま」を提案した。新たな葬送システムとして、堆肥葬とその堆肥によって育てられる種子による弔いの継続を目指し、民間信仰といった日本人の死生観に基づいた空間作りを行った。空間の提案に加え、探求プロセスとして、メモや参考にした文献、思考の四コマなどを展示した提案よりも調査を中心に行なってしまい、納得のいく提案ができなかった。修士課程でのブラッシュアップを目指したい。

参考文献

- 1) 隅田節子(2014) 『墓地の現状把握の取り組みについて』 熊本県人吉市環境課
<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/50811.pdf>
- 2) 安藤喜代美(2020) 『多様化する家族と新しい墓制・葬送のカタチ』 家族社会学研究
- 3) 坂口安吾(1948) 『太宰治情死考』 青空文庫
https://www.aozora.gr.jp/cards/001095/files/43137_30135.html
- 4) 澤井敦 (2020) 『「情報としての死」の変容：死の社会学の観点より』
法學研究：法律・政治・社会 93 (12). 1-25. 慶應義塾大学法学研究会
- 5) 澤井敦(2002) 『「死のタブー化」再考』 日本社会学会
- 6) 養老 孟司/小堀 鷗一郎 (2020) 『死を受け入れること』 祥伝社
- 7) NHK 国際報道2023(2023) 『イサム・ノグチ 幻の慰霊碑に込めた思い』
- 8) スティーブ・ジョブズ『ハングリーであれ。愚か者であれ。スピーチ全訳』 日本経済新聞
- 9) 伊藤唯真 (1997) 『葬祭仏教：その歴史と現代的課題』 浄土宗総合研究所,
- 10) 五来重(2021) 『日本人の死生観』 講談社学術文庫
- 11) 楠山正雄(1983) 『日本の神話と十大昔話』 講談社学術文庫
- 12) 桜井徳太郎(2012) 『靈魂観の系譜』 ちくま学芸文庫
- 13) 宮田登 (1985) 『日本の民俗学』 講談社学術文庫
- 14) 高橋繁行 (2004) 『葬送の日本史』 講談社現代新書
- 15) 鈴木正崇(2001) 『神と仏の民俗』 日本歴史民俗叢書
- 16) 内田樹/釈徹宗(2023) 『日本宗教のクセ』 ミシマ社
- 17) 内山節 (2015) 『いのちの場所』 岩波新書
- 18) 森下香枝(2023) 『ルポ 無縁遺骨 誰があなたを引き取るか』 朝日新聞出版
- 20) 総務省 (2023) 『遺留金等に関する実態調査結果報告書』

謝辞

今回、卒業研究に取り組むにあたり熱心にご指導していただいた須之内元洋先生にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。そして、須之内ゼミの皆さんには、暖かい優しさをたくさんいただきました。本当にありがとうございます。最後に4年間大学生活を支えてくれた家族に心から感謝します。